

聖霊降臨後第15主日(特定21) 2011/9/25

聖マタイ福音書第21章28節～32節
於:聖パウロ教会 司祭 山口千寿

今日の福音は、マタイによる福音書21章から採られています。この21章初めからは、イエスさまのエルサレムでの最後の一週間が描かれています。

イエスさまは、民衆の「ホサナ、ホサナ、万歳、万歳」という歓呼の声の中をロバに乗ってエルサレムに入城されました。そして神殿の境内で商売をしていた人々の台をひっくり返し、祈りの家と呼ばれるべき神殿をあなたがたは強盗の巣にしていると言って 商人たちを追い出し、宮潔めをなされました。

ところがこのイエスさまの過激な行動は、ユダヤ人指導者たちの怒りを買うことになりました。イエスさまのそのような行為は、一体、どのような権威に基づいて行なわれたのかと、そのあと権威についての論争が続きます。その論争の中に3つのたとえ話が挿入されています。その最初のものが今日の福音です。新共同訳聖書では、『二人の息子』のたとえ」という小見出しが付けられています。先ほどは新共同訳聖書で読みましたが、改めて日本聖書協会訳、従来の方の口語訳聖書で読んでみましょう。

(各自で読んで下さい)

お気づきになったでしょうか。新共同訳聖書と聖書協会訳聖書とでは、兄と弟の答えとその後の行動が全く逆になっています。新共同訳では兄は父の言いつけに「いやです」と言い、聖書協会訳では「お父さん参ります」と答えています。弟は新共同訳では「お父さん、承知しました」と答え、聖書協会訳では「いやです」と言っています。そしてその後の行動は、答えた言葉とは逆の行動をとっています。ややっこしいことを言って恐縮ですが、父の言いつけに、「はい」と言ったのは兄なのか弟なのか、「いやです」と断ったのはどちらなのか、聖書によって異なっているのです。

どうしてこのような違いが出てくるのでしょうか。これは、聖書というのはもともと写本によって伝えられて来ました。つまり手書きで書き写されてきたという歴史があります。その写本にいろいろなものがあります。今日のこの箇所については2種類の有力な写本があ

ります。そのどちらがオリジナルなものか、もともとのマタイ福音書に書かれていたのはどちらなのか、兄がぶどう園に「行く」と言ったのか、それとも弟が「行く」と言ったのか、学者が研究をして、これが元来のマタイ福音書であったであろうと考えられるものを復元する作業を行います。それを、本文批評と言います。その復元されたものから日本語に翻訳するのですが、新共同訳と聖書協会訳の翻訳の元になった本、底本が異なるために、このような違いが出てきたわけです。

おそらく、聖書を手書きで写していく過程の中で、もともとのものを逆さまに修正した方が分かりやすい、筋が通る、解釈する上で納得できるということで兄と弟の立場を入れ替えるということが起こったのでしょう。その結果、2種類の写本が出来てしまうことになりました。

このたとえを兄はユダヤ人、弟を異邦人に当てはめて解釈すると、福音は、最初はユダヤ人に与えられたけれど、ユダヤ人は受け入れることをしなかった。そして、後になって父なる神の御心に従った行動をしたのは異邦人であった、という解釈、これは教会の教えに沿った余りにもまともな解釈ですが、このような解釈の仕方に引きずられて、その結果、兄と弟の立場が入れ替わったのだらうと今日では推測されています。元々の形は新共同訳のように、兄が行かないと返事をしたけれど、後から考え直してぶどう園に行ったとなっていたのであろうと考えられるようになりました。より解釈が困難な方がオリジナルな読み方であろうと推測されています。

ところでイエスさまはこのたとえを語られて、「どちらが父親の望み通りにしたか」と尋ねておられます。父親の意志を行ったのは、初めは「いやです」といったけれども後で考え直してぶどう園に行った兄の方だと、この話を聞いた人たちは答えています。

ここでイエスさまが、話を聞いていた人たちから引き出そうとしたことは何であったのでしょうか。口先だけで何かを言うことよりも、実際に行うこと、父なる神さまの御心を行うことが大事だということなのでしょう。

確かに、口先だけで信仰を語るのではなくて、行いが伴わなければ何にもならないじゃないかという考え方は聖書の中にも見られます。ヤコブの手紙には、「御言葉を行う人に

なりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません」(1:22)とか、「自分は信仰を持っていると言う者がいても、行いが伴わなければ、何の役に立つでしょうか」(2:14)とか言われています。

口では大変立派なことを言い、人のやることをいちいち批判することは上手だけれども、自分は何一つ体を動かそうとしない人を教会の中でも時々見かけることがあります。(パウロ教会のことではありません。)果してそれで良いのだろうか、正直思わないわけでもありません。人は言行の一致している人に多くの信頼を寄せますから、言うことと行うことが一致していることは大切なことです。信仰と生活が常に問われる所以です。

また行動を大切にする余り、社会的に弱い立場にある人々、困難な立場にある人々の中で献身的な働きを誠心誠意行って尽くしている人を、クリスチャン以上にクリスチャンらしいなどと評価するようなことも起こってくるわけです。

今日のたとえの終わりで、イエスさまは父の望み通りにした兄というのは、徴税人や娼婦のことだと言っています。そしてこのような人たちが、たとえを聞いていた祭司長や長老たちよりも先に神の国に入るとさえ言っています。徴税人や娼婦は祭司長や長老たちよりも立派な行いをしたのでしょうか。信仰と生活が一致していたのでしょうか。徴税人はローマのために同胞から税金を取り立て、ついでに私腹も肥やしていたのでユダヤ人からは裏切り者、背教者として憎まれていた人たちです。娼婦は、その存在が社会の病的な症状を示しているとしても、金銭を見返りとして身を任せることを生業とする女性たちです。生きていくためにはそうせざるを得ない場合もあったのですが、一般的には罪の女とされていた女性たちです。このような人たちが、祭司長や長老たちよりも優れた行いをしたとは考えられません。

イエスさまが問われたこと、父親の望み通りにしたのはどちらかという、その父親の望みとは何でしょうか。このたとえの父親とは父なる神さまです。父なる神さまのお望みになること、神さまの意志は何かとイエスさまは問われたのです。そしてその問いに、自ら答えも与えられました。その答えとは、バプテスマのヨハネによって示された義の道を信じることです。

今日の旧約聖書日課では、預言者エゼキエルに臨んだ神さまのみ言葉が記されています(エゼキエル18:1~4、25~32)。「お前たちが犯したあらゆる背きを投げ捨てて、新しい心と新しい霊を造りだせ。イスラエルの家よ、どうしてお前たちは死んでよいだろうか。わたしはだれの死をも喜ばない。お前たちは立ち返って、生きよ」(31,32)と神さまのみ言葉は呼びかけています。

神さまに対する背きを捨てて一人一人が生きること、これが神さまのお望みになることです。それは人間に対する神さまの愛の御心です。このような神さまの御心に人々が従うために、バプテスマのヨハネは悔い改めを説き、義の道を示しました。悔い改めて神さまの愛に忠義を尽くすことが信仰です。義の道を歩むことです。

徴税人や娼婦はそのことを実行しました。ルカ福音書には、「民衆は皆ヨハネの教えを聞き、徴税人さえもその洗礼を受け、神の正しさを認めた」(7:29)とあります。考え直したのです。心を変えたのです。新しい心と新しい霊をもって生きる道を歩みだしたのです。神さまの愛を知り、その愛の中に立ち返り、神さまと共に働くことを始めたのです。父なる神さまの御心に生きたのです。考え直したということは、父なる神さまの呼びかけを深く心に留め直したということです。それによって自分のあり方を変えたのです。父と共にあることの喜びに生きるようになったのです。

他方、ユダヤ人の指導者たちは、「彼(洗礼者ヨハネ)から洗礼を受けないで、自分に対する神の御心を拒んだ」(ルカ7:30)のです。考え直すことをせず、変わることもありませんでした。

私たちは毎主日の聖餐式の中で、「思いと、言葉と、行いによって多くの罪を犯していることを懺悔します」と言って罪の告白をしています。懺悔が形だけのものに終わらないためには、具体的に振り返ってみることが必要であると思います。自分の思いの、どのようなものが罪を犯したことになるのか。人には言えないような思いを抱いたことはなかったか。例えば、あの人さえいなければ教会生活はもっと楽しいものになるのになどと思ったりしたことはなかったか。

自分の言葉のどの言葉が罪を犯したことになるのか。苦しみにあったような場合に神さまを冒瀆したり呪ったりしたことはなかったか。あるいは自分の言葉のどれが人を傷つけてきたのか。自分の行いのどの振る舞いが罪を犯したことなのか、義の道に反したのか、一つ一つ省みることが必要なことです。そのことを抜きにしては、正に口先では信仰者の鑑のようなことを言うが、実質は祭司長・長老たちのような頑なな石の心(エゼキエル 11:19)しか持ち合わせない信仰者となってしまう危険性がないとは限らないのではないのでしょうか。わたしたちの信仰が化石とならないように、常に新たな心と新たな霊を持って歩むことができるように、一人一人の内に聖霊が働いて下さるよう祈り求めましょう。